

2 「BELCA 賞の軌跡、そしてこれから」の作成（平成 29 年度）

(1) 趣旨

BELCA 賞の創設から四半世紀が経過したことを記念し、第 1～26 回までの BELCA 賞受賞建築物の選考評や BELCA NEWS 2016 年 4 月号の特集「BELCA 賞受賞建築物のその後」に掲載された記事等を収載した書籍「BELCA 賞の軌跡、そしてこれから」を 2017 年 10 月に刊行した。

(2) 活動の成果

書籍「BELCA 賞の軌跡、そしてこれから」（別紙参照）

BELCA賞の軌跡、 そしてこれから

LONG LIFE

BEST REFORM



公益社団法人 ロングライフビル推進協会

はじめに

「BELCA賞の軌跡、そしてこれから」の刊行にあたり、ご挨拶を申し上げます。

BELCA賞が、良好な建築物のストック形成に寄与することを目的に、わが国初の既存建築物に対する表彰制度として創設されたのは、いわゆるバブル経済期が終焉を迎えつつあった1991年（平成3年）のことです。

長期にわたり優良な維持保全が図られてきた建築物を対象とする「ロングライフ部門」と、改修により目覚ましい改善が図られた建築物を対象とする「バストリフォーム部門」の二つの部門を設け、特に優秀なものを選考委員会にて審議の上選出し、その関係者を表彰してまいりました。この間の時代の変化とともに、若干の選考対象の見直しはありましたが、賞の趣旨については一貫して不変のまま表彰を続けてきており、昨年の第26回までの受賞建築物総数は両部門合わせて256件を数えるに至っています。

受賞建築物の多くの中は受賞後の時間が経過する中で、更なる価値向上のために改修が重ねられ、適切な維持保全が実施されています。

わが国の経済が成熟化し、ストックが重視され、安定的に推移する時代となってきた今、持続可能な社会の形成に向けて、BELCA賞への関心はますます高まっています。

そこで今般、BELCA賞がその創設から四半世紀を経過したことを記念して、「BELCA賞の軌跡、そしてこれから」と題し、これまでの受賞建築物を一冊にとりまとめた書籍を刊行することと致しました。本書におきましては、長年BELCA賞の選考に携わっていただいている内田祥哉選考委員長と三井所清典委員長代理に、それぞれ「BELCA賞25周年」と「BELCA賞の選考を通じて」をご執筆頂くとともに、歴代の選考委員会による受賞建築物すべての選考評、並びに受賞建築物の関係者からご寄稿いただいた記事を掲載致しております。

受賞建築物は、それぞれの時代の中で関係者が創意工夫と愛情をもって維持保全や改修に努めてこられたものばかりです。本書がビルのロングライフ化に向けた継続的な取り組みの大切さへの認識をして頂くための一助となり、わが国のビルのロングライフ化の進展に少しでも寄与することができれば幸いに存じます。

最後に、刊行にあたりご協力をいただいた内田祥哉選考委員長、三井所清典委員長代理及びご寄稿いただいた受賞関係者各位に、厚く御礼申し上げます。

公益社団法人ロングライフビル推進協会

会長 押味 至一

・横浜赤レンガ倉庫 再生15年 -第13回BR部門-	(株)竹中工務店 中嶋 徹 …	310
・アップルストア銀座 (サエグサ本館ビル) -第16回BR部門-	鹿島建設(株) …	317
・武庫川女子大学甲子園会館 -第17回LL部門-	(株)大林組 松原 利雅 …	324
・東京タワー 58年の軌跡 -第18回LL部門-	(株)竹中工務店 西野 啓介 …	330
・ルポンドシエルビル (大林組旧本店ビル) -第18回LL部門-	(株)大林組 松原 利雅 …	336
・大成建設技術センター 本館リニューアル以降の取組み -第18回BR部門-	大成建設(株) 関 政晴 …	341

第4編 BELCA賞の概要と受賞建築物の構成について	347
BELCA賞の概要と受賞建築物の構成について :	BELCA情報管理部 … 349
歴代の選考委員	370

※第3編は「アップルストア銀座 (サエグサ本館ビル)」を
除き、全てBELCA NEWS 2016年4月号より転載

BELCA 賞 25 周年

BELCA 賞選考委員会 委員長 内田 祥哉



BELCA賞が出来て、四半世紀が過ぎた。当初は世に知られていないために、応募物件も少なかったようだったが、今では建物所有者にも周知されるようになった。周知の拡大に応じて応募数は増えるはずであるが、応募者が自ら厳選して応募するようになったため、応募数はそれ程増えていない。そして、最近では年ごとに入選のレベルが高まっている。その傾向は、今年入選したものも、来年の応募では入選しないかも知れないという勢いである。耐震補強にしても、初めの頃はしてあれば無条件で入選という時もあったが、無ければ落選という時代になり、最近では何か特別な工夫が在る補強でなければ、入選する資格は得られなくなった。建築寿命についても、当初 [1991 (平成3) 年度] は、ロングライフ部門の応募資格が築20年を越えるものとされていたが、第15回 [2005 (平成17) 年度] からは、築30年を超えるものになり、昨今は築40年以上に延長すべきという声も聞かれるようになった。

BELCA賞の始まった頃は既に戦後46年を経ているが、日本の平均建築寿命は20数年ほどと言われていた。それは戦後建てられた建物の質が低かったため、建て替えられるものが多く、平均寿命を下げていたためであった。更に、高さ制限の撤廃による容積率の導入に応じる建て替えがあり、これが寿命短縮の大きな原因となった。最近はその建て替えも一段落したため、新たに容積率が緩和される地域以外では、平均寿命は年々伸びているのが実状である。

入選レベルを高めているもう一つの理由は、応募条件の時期的・回数的制限が緩いことである。既にロングライフ部門とバストリフォーム部門の両者を受賞している建物もあるし、将来はバストリフォーム部門で再度受賞する建物が出てくるかもしれない。そうなれば応募母体は、文化財や個人住宅を除き、活用されている建築全数であり、その大きさは他の賞の応募母体の比ではない。

リフォームの内容も次第に変化している。耐震補強は、先に述べたように、もはや常識的なものでは入選資格のチケットにはならなそうである。むしろ、これからは環境設備に対する省エネルギー的改修が目立ってくるのかも知れない。設備の大型機器類は、25年或いは30年ごとの取り替えが必要である。審査を通じても見えることには、今回は出来たが次の改修が出来るかどうか、心配される建物が多々ある。今後更に四半世紀を過ぎ、BELCA賞50周年の時には、その解決が入選資格のチケットの一つになるのではないか。

第1回 BELCA 賞ロングライフ部門受賞建築物選考評

世界平和記念聖堂

所在地： 広島県広島市中区磯町 4-29
 竣工年： 1954年
 用途： 教会
 建物所有者： 宗教法人カトリック広島司教区
 設計者： 村野藤吾
 施工者： 清水建設㈱
 維持管理者： 早副 穰



世界平和記念聖堂は、昭和 25 年に着工、途中、物価高騰に直面し中断しながらも昭和 29 年に竣工した。ラサール神父の発案で世界の浄財を集め、村野藤吾が設計を担当し、清水建設が施工にあたった。

現在、建物は竣工して 40 年の間、風雪と共にして年経た感を強めていた。塔に至る外部階段は、表面は風化し、骨材が浮きでるといふ文字通り洗い流しの様を呈している。建物の外壁は、コンクリートの打ち出し部分も焦土で作ったといわれるモルタルブロックも共に触れると手に砂が残るといふ状態である。

我が国に、建設資材はおろか食料さえも未だ十分でない頃、世界各国から浄財を集めて行われた聖堂の建設工事は、現在の我々では考えられぬ程の困難な問題に直面し、工事関係者は、この建築が将来何年の間存在し続けるかということを考える余裕は無かったような状況であったようである。

事実、昭和 29 年 8 月竣工したものの工事はこの段階では完成に至っておらず、欄間彫刻やステンドグラス、扉など多くのものが寄贈によって付け加えられ、更に 10 年を経てほぼ完成された。昭和 38 年、村野藤吾が、「やっと工事が終わった」と述べたと言われる。

その後、コンクリートの劣化が進行したりして、補修の必要にせまられた。この間の維持管理は、信者のボランティア活動によってなされており、手に負えない部分を清水建設が担当することになった。

昭和 56 年、建設工事を担当した清水建設が、建物の詳細な劣化調査を実施、それに基づき可能な限りの補強を含めて、昭和 59 年補修工事が完了した。この工事は、ほぼ 30 年前の建設費に見合う費用を必要とした。詳細な調査とこれに基づく補修工事の施工要領、実施の状況は、全て写真と図面によって記録されている。この記録は、建物の補修の資料として貴重なものである。また、補修に当たっては、村野藤吾がみずから示したと言われる目地の作り方など、設計のクオリティーがいささかも失われていないことは、関係者の建物に対する意識の高さを示すものである。

聖堂は、補修をすることによって、関係する人すべてにとってさらに存在感が強まったといえよう。建設工事から補修工事に至る全過程が、聖堂をつくり続ける歴史でもあり、この過程を通じて、建築の存在価値が多くの人々に伝えられた。今回の補修を契機に、更はこの聖堂が、末永く存在し続け、建物の存在価値を多くの人達に伝えるであろう。